

■失望における訓練（3/3）

続行することは助けとなる。パウロは、人生の道ばたで失望してすねているどころか、かえって次の奉仕の場に向かって行った。パウロの愛の奉仕を必要としている人が多くいた。彼は、内住の救い主により、彼らに対してキリストのたぐいなく芳しいかおりとなることができた。ここにこそ、失望落胆における真の訓練がある。すなわち、他の人々を助けるために立ち上がること、そしてその態度や行動のうちに、人生が「キリストの凱旋の不断のページェント」であることを見出すことの中に、失望落胆における真の訓練がある。エゼキエルは、妻の急死という悲しい出来事のあった翌朝、神のメッセージを民に伝えるために、立ち上がることができた（エゼキエル 24:18）。ホセアは、たとえようもない幻滅感の中であって、「もし私たちが切に主を知ることを求めるなら、私たちは主を知る」と言うことができた（ホセア 6:3 英訳）。イザヤは、主イエスについて、「彼は衰えず、くじけない」と預言している（イザヤ 42:4）。主イエスはご自分の親類に当たるバプテスマのヨハネの悲惨な最期の模様をお聞きになった。もちろん、そのやさしいお心はかき裂かれる思いであった。しかし主イエスには、暇な時間や孤独のうちに過ごす時間はなかった。おびただしい群衆が主のお働きを必要としていたからである。主はお心の痛手を秘めたまま、人々に食物を与え、病をいやされた。そしてそうすることによって、お心の傷はいやされたのである（マルコ 6:29-44）。神に従い続けることは、どんなときにも役立ち、また心の痛手をいやすものである。

「あとにくるもの」も助けになる。どんな失望にも喜びが伴い、どんな試練にも勝利が訪れ、どんな苦悩にも「あとにくるもの」がある。聖書にははっきりとこう記されている。「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます」（ヘブル 12:11）。神のきつしみことばは、決して最後のみことばではない。困難は敗北ではない。また、失敗したからといって、必ずしもそれで終わりになるとはかぎらない。失望は幻滅である必要はない。テトスがトロアスに着かなかったために、彼の奉仕が終結してしまっただけではなかった。それどころ

か、パウロは、トロアスにおいてよりもマケドニヤにおいて、テトスをより必要としたと思われる。

私たちが神に対する感謝の心を忘れず、確信を持ち、心を強くして、キリスト者の奉仕の道を歩むとき、あるいは以前にもましてきびしい試練に出会うかもしれない。しかし、そのきびしい試練は、さらに大きな勝利をもたらす。パウロはトロアスで心が安まらなかった。マケドニヤでは「私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまな苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました」（Ⅱコリント 7:5、6）。

のちにテトスが来た！パウロには、テトスがトロアスに来ることが絶対に必要であるように思われた。しかし、私たちにはわからないある理由により、彼は来なかった。パウロの失望の原因は、このテトスにあった。しかし、それはパウロが、人生はキリストの凱旋の不断のページェントとなりうるということを学ぶためにほかならない。パウロはこの尊い教訓を学び取ると、もう一つの教訓を学んだ。ソロモンは、パウロよりもずっと前に、同じ経験をしている、「期待が長びくと心は病む。望みがかなうことは、いのちの木である」（箴言 13:12）。

ここに、失望における訓練がある。もし私たちがそれによって、有用と献身の新しい領域に引き上げられるのでなければ、私たちはそれによって滅ぼされてしまうであろう。苦痛から目を離し、感謝と確信（それは私たちの生涯を「キリストの凱旋の不断のページェント」としてくれる）の益を見出しなさい。心痛の中から、あなたに対する、また他の人々に対するいやしがもたらされるのである。

愛は攻撃を受けて成長する

愛はすべてが倒れたときにも勝ち

愛は自分をのろう者を祝福してやまない

愛は悪しきものに代えてよきものを与える

愛はそのきずなによって人を解き

愛はその傷口からゆるしを注ぐ